



TITLE:

<批評・紹介>支那政治史(上)「支那地理歴史大系」(第四編)

AUTHOR(S):

内藤, 戊申

CITATION:

内藤, 戊申. <批評・紹介>支那政治史(上)「支那地理歴史大系」(第四編). 東洋史研究 1941, 6(4): 300-302

ISSUE DATE:

1941-09-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/145740>

RIGHT:

ゐたが、博士の據つたドーソン「蒙古史」の一二六八年なる叛亂開始の年次は要するにドーソンの私見にしてその出所は元史地理志にある事から、博士の所謂東西文獻の一致は實は支那文獻の傳へる一方の記録が經路を異にしつゝ再び相會したものゝ斷じ、次にこの元史地理志の「至元五年海都叛」の記事はそれを動機として行はれた鐵連の出使が西方史料によると少くとも一二六七年以前となつて事實と符合せず、従つて至元五年（一二六八）説は成立せざる事を述べ、然らばこの年次は何年に比定すべきかについて元史安童傳の記載から先づその上限が至元二年八月にあることを定め次に至元二年八月以後、同五年以前といふ限界内に海都叛亂の年次を最も正確に傳へる史料としてマルコ・ポーロの旅行記を挙げ、そのいふ一二六六年（至元三年）なる年次が東西史料の示す關係記事の間に何等矛盾を生じないことから、この至元三年叛亂開始を確認した明快な考證である。

以上各篇につき蕪雜なる紹介を行つたが、東洋史に關するものとしては尙この外、國史の部に三品彭英氏、新羅と高句の

麗」地理の部に藤田元春氏「支那水運路の發達とその舟」考古學の部に梅原教授「浙江省紹興出土の遺物と其の遺跡」水野清一氏「付法藏傳と雲岡石窟」島田貞彦氏「滿洲熱河省大名城發見の遼代石棺等について」等があることを附記しておく。（藤原利一郎）

支那政治史（上）

「支那地理歴史大系」第四編
昭和十六年五月、白揚社發行
四六判五一四頁、定價參圓

さきに支那地理歴史大系第七編として「支那社會史」が刊行された。それによつて我々は支那社會史の最も重要問題は階級問題であること——階級問題が社會史の重要問題の全てであるかどうかの是非は別として——少くともそれが同書に表はれた執筆諸氏の共通關心であることを知つた。社會史に關する限り問題とすべき項目が諸氏の間に少しは共通して居るのを見た。

所が今度の政治史を見て私の先づ感じたことは上の様な共通性が執筆諸氏の間に著しく缺けて居ることであつた。古代

史を書かれた小川氏は民族と國家の興亡を主流とし、秦漢の宇都宮氏は政治思想を中心とする。北朝の内田氏は加ふるに諸制度を以てし、隋唐五代の那波先生は天子の統治策に重きを置かれる。小川氏以下の四氏では外交軍事も含まれて居るが那波先生にあつてはそれが除かれて居る。強ひて共通點を求めるならば國家王朝の興亡、歷代天子の話とでもいふより外仕方がない。

一體この事は何を意味するのだらうか。編輯の不統一もその一原因だらう。だがもつと根本的にいへば結局は執筆諸氏の「政治」乃至「政治史」に對する觀念の相違に歸せざるを得ないと得ふ。私のひそかに空想する所では史書の最大の役目の一つは、現代我々の持つて居る諸々の觀念の更新にあると信じて居る。政治に就いて言へば「政治」なる言葉が我々に豫想させる色々の内容を、歴史を讀むことによつてより合理的なものに、より理想的なものに、又社會生活により便利なものに變へるのが史書の役目である少くとも史書はその様な刺戟を讀者に與へる具であつて欲しい。

本書は残念乍らこの目的に役立つこと
餘り多いとは言へない様である。宇都宮
氏の考へはこの點に於て相當強い刺戟と
なり得る。氏の考へ方の當否は別として
もその筆者の觀念がはつきりして居るこ
とによつて、讀者は筆者の觀念を起點と
して物を考へるのに非常に容易である。
この事は私にいはずれば確に有益なこと
だ。結局この書全體から私が得た事は諸
氏の觀念の不一致であり、その事自身は
消極的に私をして政治史の何物たるべき
かを考へしめる出發點とはなつた。けれ
ども書物の編輯者としてはもつと積極的
な刺戟を讀者に與へたいに違ひない。

尙その他全體の體裁をいへば繁簡その
宜しきを得て居ないといふ嫌ひがないで
はない。例へば一方では唐の太宗に關し
て五十二頁を費し乍ら、他方六朝史全體
が僅かに三十二頁に過ぎないといふ有様
である。それから小川氏、宇都宮氏に地
圖が欲しかつた。又全體に一般讀者の見
慣れぬ難しい漢字や固有名詞が何の用意
もなく頻出し過ぎる。小川氏のものは内
容の性質上特にその感が強い。一般讀者
の爲に今後はもう少しお手柔かにと希望

する次第である。

次に個々の執筆者に就いて思ひ付いた
事を書いてみた。

小川氏の古代史は一口に言へばその結
構態度共に非常に學術的である。甲骨文
金文の研究家としての氏の面目を遺憾な
く發揮して居る。甲骨文金文を史料とし
て古代史を書くことは我國でも始めての
試みではない。近くは市村瓚次郎博士の
東洋史統がある。尤も之は斷片的に史料
として使はれて居るに過ぎない。又岡崎
文夫博士の支那史概説にも稍組織的に金
石學の紹介をして居られるが實際には史
料として殆んど利用されて居ない。又中
には東洋史講座(雄山閣)の橋本増吉博
士の如く之を眞偽不明の代物と片づけて
顧みない人さへある。この様な現状にあ
つて、始めて甲骨文金文を組織的に史料
として取り上げ、之を最も重要な史料と
して殷代、西周の歴史を書いたのは正に
小川氏が初めてである。尤もその一々の
研究は殆んど支那人學者のそれであり、
その點特に新研究があるとは思はれない
が、とに角現在迄の我國に於ける最も進
歩的な古代史たることは明かである。

唯甲骨文金文の學問の動向を説明する
のに頁を取り過ぎて文獻時代以降即ち春
秋戰國の叙述が稍お粗末なのが残念だ。
それと史料の少い古代史としては止むを
得ないこととはいひ乍ら、時折餘りにも
大膽な史料の使ひ方を見受ける。

宇都宮氏の秦漢政治史は本書隨一の力
作である。それは政治史といふよりは一
つの政治思想史に近い。正史の他に漢魏
叢書に收められて居る様な漢人の論著を
よく讀み、而もそれ等の個々の思想に把
はれずに、能く秦漢期全體の動きを大き
く概念的に整理した氏の努力には敬服の
他はない。この様な試みは岡崎博士もし
て居られる。けれども岡崎博士では思想
と共に史實がある。宇都宮氏にあつては
史實も思想の中に織り込まれて了つて居
る。その爲に概念は益々明確になつて居
る。この事は前にも觸れた様に讀者の歸
趨を明確にせしめる意味で非常に有益な
仕事だと思ふ。賛成もしやすく反對もし
やすい。之を出發點として次の事を考へ
るにも大に便利である。私は凡そ論文は
正にかくあるべきだと思つて居る。けれ
ども通史を書く態度としては未だ之が最

善のものであるかどうか私にはよく分らない。司馬遷の偉さは自分の論旨に不利な史實をも忠實に擧げて居る點にあるといはれる。この方が初に述べた私の史書に對する注文によりよく合ふ様な氣もする。併しとも角宇都宮氏のこの著によつて支那の政治の性格が著しく明確になつたことは確かだと思ふ。有高氏の總論にも支那では政治の理想と實際が甚だかけ離れて居ることを指摘されて居るが、宇都宮氏の文によつてその本質が具體的に明かにされた感が深い。

宮川氏の六朝史はどちらかといへば平凡だ。餘りに叙述の先を急ぎ過ぎて、讀者が一服すべき重點がない。文章も初から終りまで、ばかりで○がない感じである。

内田氏の北朝史も非常に面白い書き振りとはいひ難い。けれども氏には次の様な長所がある。それはこの本の中でその叙述が最も統制的であるといふ點である。繁簡最も宜しきを得て居る。私はこの本を読むに當つて一々要目を取つて見たのだが、氏の文ではチャンと要領のいゝ小見出しが着いて居るので全然その必

要がなかつた。書かれて居る内容も穩當なものが多い様に思つた。

その上内田氏は北朝の諸制度といふ一節を別に設けて居られるのが特に私の注意を惹いた。私の豫想した政治史の形式に近いからである。その内容も律令の制定、政治の中央組織、地方組織、司法權のあり方といふ風に、現代の政治に關する常識觀念の明確な圖式に基いて組み立てられて居る。宇都宮氏の様な觀念とは全然違ひ、觀念そのものの説明は表面に表はれて居ないがその意圖する所は明かに看取される。たゞ私としては制度の變遷、延いては次の隋代への移り工合をも少し書いて欲しかつたと思ふ。

那波先生のは本書中の最長篇である。従つて内容も最も豊富である。殊に外交外征を除いてこの長さなのであるから他篇に比べて段違ひに事も多く叙述も丁寧である。それに若い人々と違つた一種の識見と熱情とを以て書かれて居るのがその特色といへよう。唐の太宗の名君振りに感嘆措く能はず、遂に本篇の殆んど半を太宗の德を稱ふるに費されたるが如きがその一例である。唯後半唐末五代に

互る記述が前半に比し餘りに簡略なのが私にはいさゝか物足りない様に感じられた。何故ならば名醫の腕前は重病人に於て眞に發揮される如く、史家の技倆も國家衰亡の叙述に於て眞に發揮されるに違ひないと思ふからである。

有高氏の總論を言ひ忘れたが、氏の擧げられた支那の政治の諸性質はどちらかといへば私は近世の政治のその様に思ふ。この上卷に收められて居る所はむしろ氏の指摘された諸々の弊害に赴く過程ではないかと考へる。けれども我々の最も問題にする所が現代の支那であつてみれば、我々の最も知りたい所は現代支那政治の性格である。その點で氏の叙述は要を得て居ると言へよう。

以上著者が私自身の知己であるのをいゝことにして勝手氣儘な事を並べたてたけれども、それは同じく東洋史研究會の一員として志を同じくする人々に膝を交へて腹藏なく語るといふ建前からしたことで、他意あつてのことではない。この點何卒不惡御諒承を乞ふ次第である。

(内藤戊申)